

カーレン・ブリクセン
榎田啓介——訳

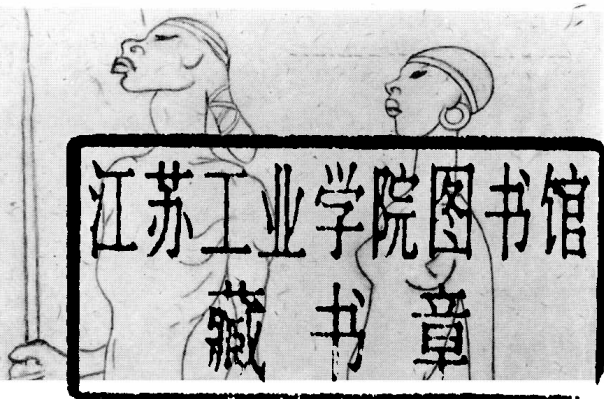
草原に 落ちる影



筑摩書房

草原に
落ちる影

カーレン・ブリクセン
榎田啓介——訳



訳者 梶田啓介 (ますだ・けいすけ)

1935年東京生まれ。法政大学大学院博士課程中退。

現在、法政大学文学部教授（米文学）、早稲田大学講師（デンマーク語）。

1980年より2年間コペンハーゲン大学に留学。訳書にイサク・ディーネセン「バベットの晩餐会」（ちくま文庫）ほか、アンデルセン、カーレン・ブリクセン、ブランドスなどに関する論文、エッセイがある。

草原に落ちる影

1998年1月20日 初版第1刷発行

著者 カーレン・ブリクセン

訳者 梶田啓介

発行者 柏原成光

発行所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前2-5-3

振替 00160-8-4123

郵便番号 111-8755

印刷 = 厚徳社

製本 = 和田製本

ISBN 4-480-83175-4 C0097

Printed in Japan

ご注文・お問い合わせ、及び乱丁・落丁本の交換は下記宛へ。

〒331-0051 大宮市櫛引町2-604 筑摩書房サービスセンター

TEL 048-651-0053

目次

ファラー

5

王さまの手紙

65

大いなる仕草

95

山のこだま

129

訳注

185

訳者あとがき

190

カイレン・ブリクセン年譜

197

草原に落ちる影

フ
ア
ラ
ー

ずいぶんと長い歳月を経て、こうして再び、わたしのアフリカでの生活の体験や経験について書き綴っていかうとすると、目の前に現れてきたたずむひとつの姿がある。背筋を伸ばしてすつくと立ち、毅然として己の威厳を守り、鮮やかな黒い肌艶をしたその姿は、さながら彼の地でのわたしの世界の門口に立つ門衛のように見える。わたしのソマリ族の召使フアラ・アデンである。この章の題名にふさわしい、もっと大きな意味を持つ人物を選べたのではないか、と異をとる読者がいるとしたら、わたしにはそんなことはとてもできない相談だったと答えるしかない。

一九一三年に初めてアフリカに渡ったとき、フアラはわざわざ船で出向いてきて、わたしをアデンで迎えてくれた。それから十八年間、フアラはわたしの屋敷と厩舎、それにわたしのサファリを、責任をもって取り仕切ってくれた。わたしは自分の期待や失望のあれこれを彼と語りあったから、わたしが何をし、また何を考えたか、彼はすべて知っていた。ついに農場を断念し、アフリカを後にしたとき、フアラは港町モンバサまでの陸路をはるばるついてきてくれた。そして、船上のわたしの目に、波止場にじっと立ちつく

す彼の黒い姿がしだいに小さくなり、ついに消えていった時、わたしはまるで自分の一部を失ったような、右手を徐々にもぎ取られていったような気がした。もう二度と馬に乗ることも、ライフルを撃つこともないだろう、これからはものを書くにも左手を使うしかないだろう、という気がしたものだ。った。

エツダの伝えるところでは、世界は二つの相対するものが出会って初めて生まれたという事になっている。

南から吹いてくる風が

奈落の口の中で霜と出会ったとき、

両者はそこで混じり合って、

水滴となり滴り落ちた。

霜は、火の力を弱めようとして

その火にあたり明るく輝いた。

そこから巨人が生まれた、

荒々しく強力なその名はユミル⁽¹⁾

ほんとうの統合体とは、本来、異質なものから構成されていなければならないのではないだろうか。そして、真の創造的な統一体とは、本質を異にする力が、あるいは相対するものが、一つに合わされるところに成り立つのだ。「類似のものを愛でる気持」はおぞましい情念で、不毛なのだ。弓には矢があつてこそ一つのまとまりをなすように、一つの言葉にそれと相対するもう一つの言葉がないところでは、わたしたちにはその言葉の意味がよく分からない、あるいは意味が変わってしまうのだ。ところが二つの言葉が合わせて口にされると、その言葉は、たちどころに人間のもつ力に翼を与えてくれるのではないだろうか。

男と女には差異があり、また相対しているからこそ、一つとなり、肉体的にも精神的にも創造力をもつ統一体となる。衣装についたホックにしても、留めるほうと留められるほう、この二つの金具があつてはじめてホックとして役に立つ。ナイフとフォークにしても二つそろつてはじめて食器として一つのものになる。だが、留めるほうのホックだけが二つあつても、またナイフだけが二本あつても、ものの役には立たないのだ。右手用の手袋は他方の左手用の手袋と一緒にして、はじめて一対の手袋というまとまりをなすこと

ができるのだ。だが、右手用の手袋だけが二つあっても、捨てられてしまうことになる。「ペア」という語は、それが異なった構成要素を合わせて一つになっている場合には——一組の新婚夫婦、一對の茶器というように——確固とした威力をもつが、単一のものを表すように使われる場合には、この語はクローネ銀貨二枚、煙草二本といったような表現になつてしまい、本来の意味は失われてしまう。

カルテットが調和のとれた統一体であるのは、四つの異なる楽器が一つにまとめられているからだ。だが、コントラバスを二十そろえて一斉に同じメロディーを奏でたら、そこには混沌があるばかりだ。

性が一つしかない社会がかりにあるとしたら、存続できないわけだけれど、統合性のない社会に違いない。一九四〇年に新聞社の特派員としてベルリンに滞在中、ドイツの女性が、そして女性社会全体が、じわじわと後退を余儀なくさせられ、抑圧されていたため、ドイツの社会全体が奇形化して、片目しか利かなくなっているどころか、まるで盲目になつてしまつていふように思えたものだ。それで、前線へと行進していく青年たちを見掛けると、ほつとした気持になつたものだった。なぜなら、戦いとは対立するものが一つになることだったから。相対する二人がいて、はじめて決闘は一つのものになる。

自分が属している種族とは本質的に異なつた別の種族との出会いが、アフリカに住むことになつたわたしに、それまでのわたしの世界をすばらしく大きく幸せなものへと広げてくれた。一目見ただけで愛さずにはいられなかつた。初めて耳にする長く響く音が、あそこでは四方八方から聞こえてきた。自分の声もまた周囲のその響きに合わせて、あるいはその響きのこだまを聞きながら、大きくなっていくような気がしたものだった。

ところで、文学の歴史を通じて現れては消え、また現れてくる独特の統合体、独特の統一体がある。わたしたちは韻文のなかでも散文のなかでもそれに出会い、それはまたあらゆる時代の衣装をまとうている。主人と従者がそれだ。まず最初に姿を見せるのは、預言者エリシャと従者のゲハジだ。⁽²⁾二人の間は、ナアマンとの出来事の後、破局に到つたに違いないと思われるのだが、さらに数章先へと読み進むと、なんとすっかり和解し合つた二人に出会うことになる。次に現れるのは、テレンティウスのダーウスとスイモー。⁽³⁾次いでプラウトゥスのカリドールスとプセウドールスだ。⁽⁴⁾さて次に登場するのは、スペインの街道を、まるで棒杭のような瘦身を馬上に乗せたドン・キホーテで、ロシナンテの尻の後ろをロバに跨がり、のそのそついていくのが従者のサンチョ・パンサだ。次は、嵐の夜リア王の後につき添つて、ヒースの原をせかせかと動き回る道化^{フイル}が登場する。次いで、ご主

人さまのドン・ジョヴァンニが貴族の館の中で「甘美な報酬を頂戴しよう」としている間、表でぶるぶる震えながら見張りに立っているレポレロがいる。思い込んだ一念に凝り固まって登場するフィリス・フォッグには、一步後ろから、世智にたけ、いつも冷静沈着そのもののパッセパルトウ⁽⁵⁾が必ずつき添っている。さて次に、コペンハーゲンの街路を腕を組んで歩いているのはイエロニムスとマウデローネ⁽⁶⁾。二人の背中の後ろではヘンリクとペアニツレが、こそこそと後指を差し合いながらついていく。

両者を比べれば、たいていは従者のほうが魅力に富んでいる、と言ってよいのではなからうか。また、もし独りでいなければならぬとしたら、その生彩ある演技は色褪せ、独特の口調の響きも力を失っていくだろうことは、主人のばあいと同様、彼の従者にだって当てはまる。レポレロは、ご主人の身の毛もよだつ最期を目撃したあとでさえ、気心の知れた仲間が集まると、得意満面、ドン・ジョヴァンニの誘惑の手にかかった女たちの名を記した例の古いカタログを取り出して、「スペインでは千三人」とたかだかと読み上げていたのではなからうか。ヒースの原で夜の闇の中で死ぬ道化^{アール}にしても、苦痛をあたえ辛辣でありながらも優しい哀れみの気持をこめて嘲笑のことばを吐く、獅子のように咆哮するあの途方もない狂気の老王がいなければ、不滅の人物にはならなかつただろう。ホルベア

の喜劇の場面が、コペンハーゲンの下男、女中といった身分の庶民たちが住む界限だけに限られていたとしたら、下男のヘンリクにしても女中のペアニツレにしても、あれほど機知に富み潑刺とした役を演じることができなかったに違いない、ということとは明白だろう。イエロニムスとその奥方マウデローネの誇り高く泰然とした態度と、息子レアンダーと恋人レオノーレの身分違いの恋の物語が、その対照としてあつてこそ生きてくる役なのだ。

アフリカでは、わたしにはたくさん召使がいた。彼らのことはいつまでも忘れられない。彼らは、あそこでのわたしの生活を共に作り上げてくれたのだ。鉄砲持ちをしてくれたイシュマエルという召使がいた。腕利きのハンターで、獣の足跡を見つけるのが巧みで、ハンター特有の人生観、ハンター特有の言葉遣いを徹底的に叩きこまれ教えこまれていたので、わたしのライフルのことを話すにも、あの「大ものの」ライフルとか「若い」ほうのライフルとか言ったものだった。生まれ故郷のソマリランドへ帰ったあと、宛名を「雌ライオン・ブリクセン様」として、冒頭に「拝啓、雌ライオン様」としたためた手紙をわたしに送って寄こしたのは、このイシュマエルだった。そういえばアフリカでわたしの最初のコックとなり、サファリでは忠実な相手になってくれたのも同じイシュマエルという名の老人だった。イスラム教の聖職者といつてもよいような、物腰の穏やかな、それでい

て大胆不敵な男だった。彼はある夜わたしと一緒に、サファリ用の大きな鞭を振って、農場の牛の背中に襲いかかっていたライオンを追ひ払ったことがあった。馬丁サイスの役をしてくれたのはマリンデイで、背丈がやっとなたしの肩までという小人だったけれど、もともとケンタウロス(1)の血が半分混じっているに違いないと思われた。それからあの孤高の姿を見せるカマンテがいた。しかし、なんといってもファラーこそ神の恩寵により与えられたわたしの召使だった。

ファラーとわたしの間にも、真に一体となるのに必要な、ありとあらゆる違いがあった。人種、性、環境、経験、どれをとっても違っていた。ただ一ただけ二人に共通しているところがあった。どうやら歳が同じだったのだ。正確なところはわたしたちには確認できなかった。イスラム教徒はイスラム暦で計算するため、年齢が問題になると、判然としないところがあったからだ。

歴史上の人物を描いた肖像画が展示された、長い画廊をめぐることがある。国王、女王、教皇の肖像、大政治家、詩人、大航海者たちの肖像がずらりと並んでいる。こうした有名な人の顔を見ていくうちに、一つだけ誰とも分らない顔がわれわれを捉えることがある。それは落ち着いた自信をみせる青年であつたり老人であつたりするのだが、風貌はいかに

も高潔で、他の肖像から超然として見える。カタログを繰ってみても、ただ「ある紳士の肖像」とあるだけなのだ。そこで、わたしはファラーを描くこの一章を「ある紳士の肖像」と呼ぶことにしよう。

いまでは、この「紳士」という呼び名は、昔ほどよく使われていない。また使われても、いくぶん皮肉を込めて口にされる。というのは、かつての紳士たちはその気取った態度に、度が過ぎるところがあつたという印象があるからだ。ファラーにも気取つたところがあつた。

クリケットやフットボールの選手にとつては、競技のルールを守るのが本能になつていて、手でボールを受け取るなどということは思いもよらないのと同様に、——そう、彼らにとつてはどんな状況になつてもそんなことはあり得ないことだろう——「紳士」とは、彼の生きる時代と社会環境の要求する己の守るべき掟を血肉としていて、その掟を守ることが本能にまでなつている人間だと定義できるとしたら、ファラーはわたしのこれまで知つていゝなかで、もっとも完璧な紳士だつた。ただ、ヨーロッパからの移住者の家に住み込むことになつた貴族的な性向をもつたイスラム教徒にとつて、守るにふさわしい掟とはどのようなものかという問題を考えねばならないことが起きると、いつも緊張を強いられ